

『教行信証』学習会 1 回目

2019年9月20日

学習形態 総論的に講義。のち各論的座談。

テーマ 『教行信証』とは何か。

— 『教行信証』撰述の意図 —

課題1 題号について

まず、この題号「顕浄土眞實教行証」をどう書き下して読むか、ということについて考えるに、幾通りかの読み方ができる。それが文法的に正しいか云々というよりも、むしろ親鸞の求めたものは、眞実であることは明白であるから、何の眞実を明かそうとしているのかを追求したいのである。

いうならば、「浄土の眞実」なのか、「眞実の教行信証」なのか、はたまたその両方なのか。全体を見ると、明確に二つの内容が浮き彫りになる。ひとつは「方便化身土」に対する「眞実の仏土」ということ。もう一つは、眞実の「教」「行」「信」「証」である。

そうなると、後者においてその内容は「教」「行」「信」「証」なのに、表題には「信」が組み込まれていないのは何故なのか、という問題がのこる。

そもそも、何故「眞実」を求めようとするのか。ここを基点に考えていきたい。

宗教が「ただ信じる」という行為とするならば、信ずべきその眞実性を問うことはむしろ哲学と言うべきであろう。親鸞は師法然に導かれた浄土眞宗が眞実の教であるのかということを確認しようとする。これは親鸞聖人の哲学であろう。

課題2 『総序』について

1 「ひそかに以みる」という言葉から始まるが、この言葉の意味する親鸞聖人の心境は何であろうか。まずもってこの言葉に『教行信証』撰述の意図がうかがえるのではないだろうか。少なくとも世間に公表しようという意図では決してない。寧ろ内面的な思考である。言うなれば、憶念、思惟、思索、確信などの言葉のほうに適正に感じられる。それは内に秘めた問いを明確にしたいという意志のあらわれではないのか。

2 『総序』の構造

まず、内容的に言えば、前半と後半の二つに分けられる。

その前半は「ひそかに以みれば」から「この徳海にしくなし」まで。後半は「穢を捨て」から最後まで。前半は理、後半は事とみることができる。まず前半を見てみよう。その前半を図式化して書いてみると次のようになる。

『教行信証』学習会

- ① 「教」 難思の弘誓 本願 = 本願力 救済の原理
無碍の光明 阿弥陀仏 = 住持力
『大経』の意

これは、阿弥陀如来の威徳が述べられている。これを法蔵菩薩の本願力と阿弥陀仏の住持力に充当させてみた。これが衆生の救済の原理だ。(参『21世紀の信仰』)

- 「行」 歴史的現実が起こってくる現象 救済の現象
「教」の救済原理が現象してくる事実
『観経』の意

次に述べられてくるのは、その救済の原理が歴史上に具現化してくるということ。まったく具現しない原理は原理の意味がないし、その存在も認めることもできるはずもない。

- 「証」 「権化の仁」 = 「報応化種々の身」 救済の結果
『阿弥陀経』の意... 六方の諸仏

そして、具現化された歴史的あるいは現実的人物は、如来の応化身であることを証明していく。

- ② [かるがゆえに知りぬ]

- | | | | | | |
|----|------|---|----|-------|------|
| 嘉号 | 大行 | = | 正智 | 真実の行信 | 他力 |
| 信楽 | 大信 | = | 真理 | | |
| | P157 | | | P190 | P190 |

如来の嘉号を智慧と抑えるのは如来の智慧ということだ。如来の智慧は我々衆生の上には行となって働く。智慧のない行為は真実にはなるはずもない。如来の信楽は絶対的の道理であるがゆえに、衆生は信じざるを得ないのである。

- ③ [しかれば]

- 修し易き真教... 真実の教 [如来の智慧なるが故に]
往き易き捷徑... 浄土真宗 [衆生の生きる原理なるが故に]

- ① [穢を捨て]

次に、後半の部分についても、同様に図式化していくと次のようになる。後半はいわば、身においての事実を述べている。

真実の行信の作用

そして、それを受けて、標挙の文に言われる内容がここに示されてくる。これは親鸞の歩み始める基点であろう。そのことはここに名告りをあげていることから察することができる。その名告りは、やがて掲げる標挙文の内容をここに示すことによって暗示しているのではないか。

『教行信証』学習会

つまり、下記の通り「真実の教」と「浄土真宗」とに整理できるのではないか。

⑤ [誠なるかなや] 真実の教 結びの言葉

⑥ [ここに愚禿] 浄土真宗 { 七祖との出会いと聞法
如来の恩徳を知る

ここの⑤、⑥をもって、標挙の文の内容を総括しているのではないか。

⑦ [愚禿釈親鸞] 次回、撰号についての範疇であるが、「僧に非ず俗に非ず」と言われながら、何故「釈」を名乗るのか、ということ問いとして残しておく。

『教行信証』学習会 2 回目

2020年1月15日

学習形態 総論的に講義。のち各論的座談。

テーマ 『教行信証』とは何か。

— 『教行信証』撰述の意図 —

課題3 標挙について

標挙はどれに付属しているものか

○ 総序の最後についているのか。教巻の最初についているのか。

○ 問題の所在。「専修寺本」「西本願寺本」の対比。

「草稿本」は欠損していて不明であるが「清書本」の「西本願寺本」「専修寺本」二つはあまりのくい違いが見られる。ということは当時の人も迷われたのであろうと想像される。

この問題を考えるにはこの内容をどう見るかにかかってくる。この文字の羅列を図式としてみるべきか。当時において、図式的表現方法があったであろうか。もしあったとすればそう判断していけばいいし、なかったならば、親鸞の技法はとてつもなく驚きに値する。

標挙をどう読むか

大無量寿経 真実之教
浄土真宗

○ 無量寿経優婆提舎ということか。この問いを立てるにあたり後述の名告りの問題に絡んでくる。「親鸞」という名告りが、菩薩の決意であるならば、「自分が『大無量寿経』を論議するにあたり、二つの内容をもって論議する。一つは真実の教であることを命題として、二つはその命題がどのように証明されていくのか、その相を示す」という風に読める。つまり『無量寿経』をウバダイシャしてきた二人の名を頂くことにおいて、無量寿経優婆提舎していくという決意表明が示されていると了解できるのではないか。

課題4 「真実之教 浄土真宗」が『大無量寿経』のウバダイシャ（論議）になりうるか

真実之教 論議の体 教相判釈 本質

浄土真宗 論議の相 往と還の相 展開（現象）

『教行信証』学習会

- この時の「教」は広的な意味で、いわば「宗教」という意味合いが強いように思われる。つまり、広く宗教的なものの中に「真実の宗教とは何か」を問うているのではないか。→ 了義教（『化身土巻』の課題）

課題5 親鸞の論議の方法あるいは手法

- 「文類」… 他者の文章の収集と配列… 歴史的人物による証明
但しそれらの人々が、すべて正しいという前提を基にしているならば、そのことが正しいことの実証が必要である。
そこで、我が身自身の実生活の上に実証されることにおいて証明しようとしているのが『信巻』と『化身土巻』であると想像される。
- 宗教の論理構造の問題性……宗教のほとんどが神あるいは佛の示すものを絶対的“真”としてその上に立って論理をたてる。それは、哲学では「権威的誤謬」と言われるのだが、宗教では当然のごとくまかり通る。
我々も「誰々先生がこう言っている」ということで“真”をたてるが、同じ問題性を認識しなければならない。
- 個人的絶対性……親鸞はなぜ真実を求めたのか。かつて釈尊の時代においても絶対性は否定されていた（縁起の法）。すなわち釈尊が説かれ言語化された法も絶対ではない。従って仏弟子および後世の高僧に於いてもしかりである。各修行僧が達した悟りであっても絶対性とは言い得ない。
逆に言えば、釈迦もその後の弟子たちも真実を説く者が出てきておかしくはない。仏とは「目覚める者」を意味する代名詞なのだから。
- 真実性の概念……普遍性。共通性。これは客観性を意味する。しかし法蔵菩薩、阿弥陀仏が客観的に万人に認識できるであろうか。いや、それは不可能である。「法性法身は色もなく形もましまさず、言葉も絶えたり」と言われるわけであるから、それをどのように証明していくのかが問題なのである。
それについては、自らの上に実証していく方法をとっている。言うなれば主観的実証である。自らの身に現象していることにおいて証明しようとする哲学的思考に他ならない。逆に言えば、我が身の上に現象せしめている何者かの存在をもって真実を証明しているのである。

『教行信証』学習会

参) キルケゴール 「主体の関わり方が真理に貫いてさえいれば、答えは真理に立っている。」

- 「三帰」に「無上甚深微妙の法は～ 如来の真実義を解したてまつらん。」とある。この言葉と重なってくるのではないか。これが私たちの学びの基本。

課題6 撰号について

- 親鸞という名告りの根拠。(天親、曇鸞の名をもらっている)

— 菩薩としての名告りか? —

なぜ名告りの根拠を求めるのか。親鸞は名前にこだわる人物か、と考えるに、法然の念仏の教えに生きる身として、南無阿弥陀仏という名号を大切に分析解析していることから、自分みずからの名前にもこだわって当然である。従って自ら名告る名前にもそれなりの根拠があると考えておかしくはない。

いうまでもなく、「禿」については明確に理由付けをされていることは周知のことである。それならば「釈親鸞」についても、その根拠があるはずであり、何処かに示されているのではないか、と考えるのは、むしろ必然である。

「親鸞」の名告りは天親と曇鸞の一字を頂戴しているといわれている。その出典はわからないが、それ以外はどうしても考えられない。それを置いておいて、ともかく、なぜ天親と曇鸞なのかを考えると、背景には『浄土論』『浄土論註』という共通の内容が見いだされる。天親と曇鸞の二人を背負うということは、この二論を背負うということの意味してくる。

これは『大無量寿経寿経』の優婆提舍であるということであるから、親鸞聖人の心には、同じように『大無量寿経寿経』を優婆提舍しようという志が見えてくるのである。つまり、言ってしまうと菩薩の名告りではないのか。これは単なるうぬぼれではない。親鸞の覚悟なのだ。私にはそう読み取れる。この時の「釈」は菩薩の「道」である。覚悟したものが歩む道。覚悟には道が生まれる。道が生まれぬような覚悟は覚悟とは呼べないであろう。その覚悟の根拠が『総序』の「ここに愚禿釈親鸞～」以降に述べられている。

再び『総序』へ

(恩徳讃)

- 「ここに愚禿釈親鸞～」 西番月支の聖典..... 師主知識の恩徳
真宗の教行証を敬信... 如来の恩徳

この名告りの後、上記の二つの内容が述べられている。それは諸師との出会いと聞法。そして如来の恩徳の深さを知ること。これは、言ってしまうと『恩徳讃』の文言と重なってくる。このご恩を感じるということにを射て真実であることを証明しようとされているのではないか。

このことは、『正信偈』信すべき内容を「高僧説」と「如来の如実言」の二つ提唱されているところからも知ることができるであろう。

『教行信証』学習会

『正信偈』へ

○ 「信ずべし」

唯可信斯高層説

応信如来如実言

唯信釈迦如実言（文類偈）

○ 「応」と「可」。どちらが強いのか。

応……料度の辞。推量。ナルベシとよむ意。

可……肯、許なり。否に対す。

名告り 愚禿 後序 身の事実としての名告り
積親鸞 総序 七祖の伝統に巡り合ったことの名告り

愚禿	=	僧に非ず俗に非ず	身の事実	—	大乘
積	=	「僧に非ず」と言いながら何故			
		「積」の字を使うのか		—	道
親鸞	=	背景に『浄土論』がある		—	菩薩

参) 『北本涅槃経』(第三)「我涅槃の後～爾時多有為飢餓故 発心出家 如是之人名為禿人」

『南本涅槃経』(第五)「愚痴僧」

『増一阿含経』(卷二十一)「四河海に入りて復河の名なし。四姓 沙門となりて皆積種と称す」

『入山願文』(伝教大師)「塵禿の有情 低下最澄」

参) 和讃には「積」の字が使われていない。(愚禿親鸞作 愚禿善信集)ただ、『愚禿悲嘆述懐和讃』には「積親鸞之を書く」と述べられている。

『尊号真像銘文』には「和朝愚禿積親鸞が『正信偈』の文」とあるが、末尾には「愚禿親鸞八十六歳」と記している。